

益田市長
山本 浩章

音楽は、数ある芸術のなかでも純粹に世界共通という点では特別な位置づけにあるように思います。

例えば文学などは言語なしには成立しない以上、おのずと言語を同じくする民族や国家のなかで生まれ、広まるものです。母語が異なる人が触れるためには、外国語を相当程度習得するか、さもないければ翻訳というプロセスを経る必要があります。

絵画や彫刻などもやはりなんらかの歴史的、文化的背景を持つことが多く、時代や地域と無関係の作品は思うほど多くはありません。例えば、ルネサンス期の絵画の名作はギリシア神話や聖書の説話に関連するものが多く、基本的な知識を持たないまま作品の意味を十分に理解することは困難な場合があります。

この点、音楽は、人によって好みや感覚の違いはあったり、または民族音楽などもあったりするにせよ、

誰でもただ聴くだけでその美しさ、楽しさ、悲しさに魅了されていますが、たえその意味はわからなくとも感動を味わうことはできます。

映画「地獄の黙示録」の爆撃シーンでも流れた「ワルキューレの騎行」は、運転中に大音量で聴くと気分が高揚しすぎて交通事故を招くとまで言われる曲で、音楽の威力を物語る実例の一つです。これ作曲したオペラ音楽の大家リヒャルト・ワーグナーは大変な自信家でもありましたが、そのワーグナーですら自分を凌駕する唯一の音楽家として崇拜したのが、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンでした。

ベートーヴェンの生涯は、フランス革命によって旧体制が崩壊し、続いてヨーロッパ全土に戦争の嵐が吹き荒れた動乱の時期と重なります。個人としても聴覚を失っていくという絶望の中、かつての王侯貴族のサロンを和ませる典雅な趣向ではなく、大衆の心を揺さぶる革新的な芸術を追求し、音楽の領域と可能性を大胆に押し広げたのです。

新種の病原体が世界を一変させた2020年は、音楽を通じて人類を鼓舞し続けた「楽聖」の生誕250周年でもありました。

日本遺産のまち益田の歩き方

第4回 大喜庵

【問い合わせ先】

益田の歴史文化を活かした観光拠点づくり実行委員会
担当：市文化財課 ☎ 31-0623

大喜庵の地には、かつて雪舟が滞在し亡くなったとされる東光寺がありました。

大喜庵やその周辺には、古墳時代後期の6世紀に造られた前方後円墳の小丸山古墳（市史跡）や平安時代後期の木造観音菩薩立像（県指定有形文化財）があり、古くから栄えていたことがうかがえます。

東光寺は山号妙喜山、俗に山寺といい、初代住職は石窓長琅だといわれます。宝徳2（1450）年冬、長府（下関市）長福寺、京都東福寺など、主要な寺院の住職を務めた勝剛長柔が、東光寺に移りました。長柔は益田氏一族であり、大内氏ともつながる人物で、長柔が京都を去ったことを惜しんだ人々により中央への復帰が画策されたほどの名僧です。長柔の後、住持となったのが竹心周鼎（土鼎とも）で、文明6（1474）年に焼失した東光寺の復興に尽力し、同10年に仏殿を再建しました。翌同11年、周鼎は雪舟筆の「益田兼堯像」（重要文化財）に賛（描かれた人物を称える文章）を書きました。

近年、長柔や周鼎らと中央や大内氏周辺の禅僧の人脈についての研究が進み、益田兼堯像を雪舟が描いた背景が明らかになりつつあります。

東光寺は、天正8（1580）年に全山焼失したといわれます。その

後、雪舟ゆかりの地が荒廃していることを憂いた都茂出身の僧侶大喜松祝により、元禄3（1690）年に大喜庵が建てられました。宝暦年間（1751～64）には、乙吉の庄屋金山太右衛門らによって雪舟の墓が改築されています（乙吉大喜庵墓地雪舟墓〈市史跡〉）。現代においても、平成2（1990）年に市立雪舟の郷記念館が隣接して開設され、同17年には益田市雪舟顕彰会により、伝雪舟墓の再建が行われています。

大喜庵とその周辺は、雪舟ゆかりの地であるとともに、益田の人々の雪舟への追慕が込められた地でもあります。

場 乙吉町イ1204

石見交通バス浜田益田線、久城線、土田線など。イオン前バス停徒歩5分。



大喜庵